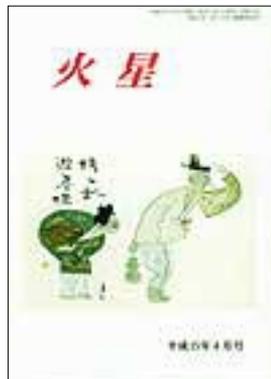


火星

平成 15 年 5 月号



PDF 制作 俳誌の salon

四大抄

山尾玉藻

綿菓子に芽吹き
の風を絡めたる

桃の咲く夜をまんばう
の浮きゐたる

春炬燵足を遙かに伸ば
したり

蝶歩く壬生念仏の手摺
かな

面々に脇息のあり亀の鳴く

喪こもりにつくりし大き草の餅

春昼の二階の音を仰ぎけり

菜の花の三本切りの日向かな

草の上に置かれし仔猫鳴きにけり

月出でしより猫の仔の鳴くことも

火星作品

山尾玉藻選

踏青の草ゆるゆると起き上がる
箕面 浜口高子

朧夜の山裾に張る風呂の水

涅槃会のさなか馬穴の水撒かれ

鴨二羽と三羽行き交ふ春浅し

鳥たちのはたと消えたり種袋

水仙悼 差知子先生のこの道をゆくばかりなり
吹田 伊藤多恵子

畑打つや藪の椿のひとつ落つ

ふきのたう踏みたる声を発しけり

穂の芽や突然にくる肩の凝り

鳥雲にもぐさ大きく丸めけり

閑かなる刻にありけり盆の梅
神戸 堀 博子

餅花の揺れぬる廊に行き当たる

氷爆を見に行く足の奮へをり



凍 滝 の 中 の 水 音 曲 り け り
寒 明 け の 夫 の 焼 き た る 大 鯛
貝 寄 風 や 二 つ づ つ 置 く イ ヤ リ ン グ
靴 跡 の 重 な る あ た り 凍 解 け る
一 つ づ つ 確 か む 荷 物 寒 昴
春 潮 の ひ と り ソ フ ァ ー に 沈 み を り
二 ン 月 の 伊 勢 神 宮 の 風 木 立
山 笑 ふ 母 乳 ゆ た か に 嬰 が 噎 び
日 に 透 け る 少 年 の 耳 椿 咲 く
竹 落 葉 踏 み ゆ き 誰 も も の 云 は ず
春 雪 の 尾 根 へ 指 笛 ひ び か す る
水 仙 や 父 の 遺 品 の 刀 の 鏢
つ ち ふ る と す つ ぽ ん 鍋 を 囲 み を り
太 刀 魚 の 身 丈 の ひ か り 余 寒 か な
野 梅 咲 き 障 子 に 骨 の あ り に け り
賽 銭 の こ ろ が り ゆ き ぬ ク ロ ッ カ ス
沖 の 船 い ま 穂 の 芽 に さ し か か る

兵庫 大東由美子

芦屋 柳生千枝子

八幡 吉田島江

選のあとに

山尾 玉藻

ふきのたう踏みたる声を発しけり 伊藤多恵子

句意は明瞭。「路の臺」は優しげで可憐な姿をしている。それを踏んだ瞬間の驚きの声である。しかしもっと大事なことは、真つ先に春を感じさせる植物を見つけた驚きが作者の声の中に含まれていた事である。

凍滝の中の水音曲りけり 堀 博子

「凍滝」そのものを突っ込んだところで詠んだ句である。やや離れた所から見れば、滝は全体が凍っているであろう。しかし近寄って静かに聞けば確かに水音がしていたのだ。しかも途中で曲がっている音だった。岩肌に沿って滝水が流れているのであろう。佳句である。同時作のへ餅花の揺れゐる廊に行き当たるゝも良い。

貝寄風や二つづつ置くイヤリング 大東由美子

「貝寄風」は春先に難波の浦に吹く強い「西風の事。風土性と言うのか、強風とは言え明るさを感じさせる風である。「二つづつ置くイヤリング」はごく当たり前の事を、言った

までだが、「貝寄風」と配合する事によつて成功した。駘蕩とした気分が感じられる作品である。

沖の船いま穂の芽にさしかかる 吉田 島江

典型的な遠近法による作品である。棒の先に付いているような「穂の芽」を支点に、「沖の船」を動かしている。その船もタンカーのような簡潔なものが良いだろう。

クローバーにひしやげて使ふ山羊の顎 嵯峨根鈴子

「ひしやげて」の俗語が此処では活かしている。あの「山羊」の顔を想う時、「ひしやげて」と言う表現が適當であることがよく解かる。俗語使用の成功率は低いがこう言った鍛錬も遣つてみるべきである。

長閑しや土蔵の窓に人の顔 大山 文子

「土蔵の窓」に人の顔が見えるなどと言う事は滅多に無い事だ。しかし作者はその珍しさで作句しているのではない。まるで額縁の中の顔のようにユーモアを覚えたのである。「長閑しや」の季語がそう思わせる。

探梅行ときをり山を見てゐたり 戸栗 末廣

「探梅行」とあるから未だ早春の頃である。作者は山が

りの梅林を歩いているのであろう。寒さとちよつとした疲労で時折休む時、遠くへ眼を遣つたのである。遠景の山と眼前の梅の花と絡ませた、これもまた内容的に遠近法を取り入れたと言えるかも知れない。

春月や恋の敵も寝たつきり 田中 吞舟

もしかするとこの手の句は何処かに在るかも知れない。しかし作者の現在の境遇を思う時、遣り過こす訳にはいかない一句である。「恋の敵も」は絶対的、大きなユーモアと小さなペーソスが感じられる。何よりもこう言う句が詠める作者に好感を抱く。

緋毛氈に座ぶとんふたつ日永かな 丸山 照子

歳時記の例句にでもすれば良さそうな作である。人影がなくだ「座ぶとん」が二つあるだけ、それも緋毛氈の上にある。長閑な時間が流れている。

島々は横一線に春来たる 川島 盈

瀬戸内海などの島々を想像すると良い。いずれも丸くて低い島々、当然芽吹きも同時期で明るい景である。点在する島々を「横一線」と捉えた所が面白い。

立春の植込みどこか揺れてをり 若林 光子

風で揺れているのか、鳥が揺らしているのか、この句からは定かでない。また、何処であるかも知れなかった場所設定である。揺れていたのは確かだったのだろうが、一瞬を意識した作者の心の中の揺れと取る事が出来る。

ふんはりと足とられけり下萌ゆる 山口美年子

踏青や描の蹠を思ひをり 柳生千枝子

同じ体験の句であるが、美年子さんの句は直裁的、具象的であり、千枝子さんの句は感覚的、進歩的（突っ込む）と言える。後者の「猫の蹠」に大いに納得出来る。前者の一見して読者が理解できる句も捨て難い。稚拙そうにも見える冗長な表現がこの作品には合っている。

看護する朝の化粧や笹子啼く 橋口 幸子

ご主人の貞保さんが階段から落ちられ療養中とのことである。「看護する朝の化粧」は看護する為の因果と解されそうだが、そうではなく常の化粧なのであろう。女性としての嗜みの化粧なのだ。それを因果表現に持って行ったところにこの句の手柄がある。これもまたユーモアとペーソスを感じさせる。

差知子俳句鑑賞

ひたひたと水寄すごとく夏の暁 差知子

(『岡本差知子句集』より 昭和五十五年作)

夏の明け方の涼しさ。水の流れのような明け方の空気を全身で感じ取っている。

「ひたひた」の言葉選びの確かさを感じる。

(千枝子)

玉藻俳句鑑賞

露むいていち日むいてゐるやうな 玉藻

(『新日本大歳時記』講談社より)

露が店頭に目につく頃になると、この句がつい口をついて出てくる。普通の句とはこういうものではないかと思う。するとすると瑞々しい音をさせながらもふつと溜息が聞こえてきそうである。

(高子)

恒星巻

木野本加寿江

吾が影に影の重なる梅の花
盆梅の雪払ひける筆の先
桜草半日かかる探しもの
幼児の歩み確かに鬼は外
雨粒のぼつんと頬に若菜摘み

加古みちよ

小池 愼女

浮寝鳥あつさりと濠飛び立ちし
犬の尾のしきりに動く枯の中
左義長を組み終りたる縄の屑
嵌めてみて赤き手袋小さかり
きさらぎの別れとなりぬとこしなへ

岩ざくら静かに揺れて日暮れけり
久に会ふ妹の素顔水温む
忘れ物ばかりが増えし福寿草
眼裏に夫の声あり梅に佇つ
農道の外灯増えし春立つ日

金澤 明子

嵯峨根鈴子

差知子先生悼二句
行きまますや二月の光こぼしつ
春寒く一人離れて悲しめり
息白く来て白ばらに向き会へる
冬終る月の光りの駐車場
日脚伸ぶエデンの園に句会生れ

終屋 俵屋と来て二月尽
きさらぎのイノダの椅子を温めをり
春の雪おぼるうどんの濁りあり
春の草足して玉子で綴ぢにけり
シュレツダー眠たき春を吐き出しぬ

獅子座

山尾玉藻推薦

堀 義志郎

戸栗末廣

山田美恵子

啓蟄の甕に泡の立ちにけり
春燈にひろげし母の素焼きなり
雛の前利発な猫に見えてきし
水仙の蕾ふくらむ月あかり

高尾豊子

中野八重子

三宝に鎮座してゐる福の豆
厄落子鬼躓きゐたりけり
鬼となるための稽古や節分会
寒染に鷹の羽紋を受け継ぎぬ

吉田泰子

小林成子

マスクして飼犬に近づきにけり
風花や酒まんぢゅうの湯気あがる
野遊びの前髪ぬらしゐたりけり
日曜日土竜打ちなど見にゆけり

厚氷紐締め直す編上靴
大阪の目白は黒し白椿
鍾乳洞通り過ぎたる鱈釣
春光やレンズに余る日本丸
雀らのすぐに飛び去る涅槃像
菜の花へミシンの音のつづきをり
母のことふつと笑ひぬ磯菜摘
リラ冷の旅のベッドを余しをり
水たまり一気に跳びて入学す
霞より駈けて来し子の息使ひ
いつもより茶を濃くあつく春の雨
ぬるむ水荒使ひして昼厨

トルコ桔梗の白一本を手向けけり
幼子が手を引かれゆく春の葬
葬ひの夕べ帰りぬ沈丁花
ほろ酔ひの膝にマフラー母にかな